A-1 中国語の原因型結果構文に対するフレーム・コンストラクション的アプローチ

陳 奕廷（三重大学）

１．はじめに

中国語の原因型結果構文とは(1)のような構文で、構文全体の主語が状態変化を引き起こす原因を表し、中国語結果複合動詞 V1V2 の主要部だとされている V1（“吃”eat）の動作主にあたる項が、構文の目的語の位置に実現しているという特異な項実現が特徴的で、多くの研究が行われてきた（Li 1995, 秋山 1998, Sybesma 1999, Huang 2006, Her 2007, Lee & Ackerman 2011, 沈 2013 など）。

(1) 違禁減肥藥　吃死　醫學生。
illegal-diet-drug　eat-die　medical.student
‘The illegal diet drug caused a medical student to die from taking it.’
(<http://www.chinanews.com/jk/2013/04-27/4772258.shtml> 2018/05/12 確認)

従来の研究では説明のしやすさを重視して、主に作例が用いられてきたが、実際の容認度が低い不自然な例文になっている場合が散見する。そのため、本発表は google 検索で用例のあるものを検討する。

2 節で詳しく述べるが、近年では石村 (2011)、于 (2015)、邱 (2017) が共通して、原因型結果構文の成立条件として、V1V2 が再帰的な構造を持つこと（X が V1 した結果、X または X の一部に V2 の状態変化が生じる）を挙げている。しかし、ある複合動詞が再帰的な構造を持っているかどうかをどのように判断するのか、という課題がある。もっと言えば、なぜ“吃死”という複合動詞は存在するのに、“*舔死” (lick-die)が存在しないのか。これは秋山 (1998) や于 (2015) で用いている「語彙概念構造 (LCS)」のような簡略的な意味構造では説明できない問題である。さらに、従来の研究で言及されていない意味的な制約として、原因型結果構文はネガティブな状態変化を表すものしか成立できない。例えば、“吃飽” (eat-be.full) と(1)の“吃死”は共に再帰的な構造を持っているが、“吃死”は原因型結果構文として成立するのに対し、“吃飽”は(2)のように成立できない（“睡飽” (sleep-be.full) ‘sleep enough’、“睡醒” (sleep-wake.up) ‘wake up from sleep’、“坐好” (sit-be.good) ‘sit properly’、“坐齊” (sit-be.complete) ‘sit all together’、“學乖” (learn-be.clever) ‘learn to be clever’ なども同様）。

(2) *豐盛的大餐　吃飽了　我。
lavish-GEN-big-meal　eat-be.full-PERF　I
Intended: A lavish meal caused me to be full of eating it.

また、ある原因によってある位置変化が起こるという場合は、(3)のように原因型結果構文として成立できないが、なぜ原因型結果構文が状態変化にしか使えないのかを説明する必要がある。

(3) *香蕉皮　從樓梯　摔下了　張三。
banana.peel　from-stairs　fall-down-PERF　Zhangsan
Intended: A banana peel caused Zhangsan to fall down from the stairs.

(4)の“飄起” (flutter-rise) のように、一見(2)と(3)の意味的な制約の反例のように思えるものがあるが、“飄”は『教育部重編国語辞典修訂本』（<http://dict.revised.moe.edu.tw>）によると他動詞の用法があり、また、“強風把裙擺飄起” ‘a strong wind blow up the skirt’ (<http://traverlover.blogspot.com/2014/07> 2018/05/12 確認) のように、他動詞しか取れない“把”構文で現れることも可能であるため、(4)は他動詞構文の例だと考えられる。

(4) 微風　飄起　她淡色的秀髮。
breeze　flutter-rise　her-light-GEN-hair
‘A breeze blew up her light hair.’
(<http://big5.cri.cn/gate/big5/news.cri.cn/gb/2201/2005/09/19/1405@707133.htm> 2018/05/12 確認)

本発表はフレーム・コンストラクション的なアプローチから、原因型結果構文を(5)のように定義する。

(5) 原因型結果構文（↔は形式と意味の対応関係を表す）
[NP1 V1V2 NP2] ↔ [ある原因 NP1 のせいで NP2 にとって好ましくない再帰的な状態変化 V1V2 が起こる]

その上で、原因型結果構文がなぜこのような特異な項実現パターンを持つのかということについて 3.1 節で説明する。この構文に個々の構成要素の「語彙的意味フレーム（陳・松本 2018）」という意味構造を埋め込むことで、複合動詞が再帰的な構造をしているかどうかを判断できることを 3.2 節で示す。3.3 節では(2)と(3)に見られる意味的な制約が構文の「慣習化 (conventionalization, Traugott & Trousdale 2014 を参照)」によるものだと主張し、コーパスのデータに基づいて実証する。また、4 節では、ほかの使役構文（“使”、“讓”構文）と比較することで、これらの制約が原因型結果構文特有のものであることを示し、その理由を明らかにする。5 節で結論を述べる。

２．先行研究とその問題点

従来の原因型結果構文の研究には、小節（small clause）として分析した Sybesma (1999) や、軽動詞併合の観点を取る Huang (2006)、使役役割を用いて説明した Li (1995) 及び Her (2007)、構文文法（Construction Grammar）の枠組みから分析した Lee & Ackerman (2011) などがある。紙幅のため、これらの研究がそれぞれ抱える問題点については触れないが、全体的な問題点としては、原因型結果構文の V1V2 が再帰的な構造を持たなければならないという事実を捉えていないことが挙げられる。

それに対し、石村（2011）は V1V2 が再帰的な構造を持つということが必要だと主張し、その後の于（2015）及び邱（2017）の研究においても、主張の違いはあるが、再帰的な構造が必要だという点で一致している。しかし、これらの研究に共通する問題点として、なぜこの構文の V1V2 が再帰的な構造に限られるのかを説明できない。石村（2011）において、原因型結果構文は再帰構造を持つ自動詞文に、臨時的なエネルギー源として捉え直された「原因主」が導入されて他動詞化したものだと述べているが、なぜ再帰構造のものに限られるのかは不明である。于（2015）は結果複合動詞の項構造において、項 α に対象（theme）の解釈があるときに限り、項 α は目的語（内項として項構造に）に具現化される。そして、その場合は主語（外項）がなければならないと主張している。しかし、(6)のような例において、目的語の“許多人”は V2 の theme だが、外項は存在しない。

(6) 大雪　冷死了　許多人。
big.snow　feel.cold-die-PERF　many-people
‘The heavy snowfall caused many people to die of cold.’
(<https://books.google.co.jp/books?isbn=9887739219> 2018/05/12 確認)

邱（2017）は原因型結果構文の形成については、構文のツリー構造において、動詞 V1 が軽動詞 BECOME と併合してから、さらに軽動詞 CAUSE の位置に上昇するというプロセスを仮定している。しかし、このようなプロセスの妥当性の有無は抜きにしても、この仮定だと主語の名詞句と V1 が文法的な関係（動詞―補語）の関係になければならないと主張しているが、次の例において、“看”と“暗黄的燈”はそのような文法的な関係にはない。

(7) 暗黄的燈　看壞　我的眼睛。
dim.yellow-GEN-light　read-be.broken　I-GEN-eyes
‘The dim yellow light makes my eyesight get worse from reading under it.’
(<https://www.jianshu.com/p/34e8b98a705f> 2018/05/12 確認)

また、先行研究に共通する重大な問題点として、なぜ(2)と(3)のような意味的な制約が存在するのかを説明できない。本発表は次節より原因型結果構文がなぜ成立するのか、そして、なぜこれらの制約が存在するのか、その動機付けを明らかにする。

３．原因型結果構文のフレーム・コンストラクション的分析

３．１　原因型結果構文の成立

フレームとコンストラクションに基づく分析に入る前に、なぜ原因型結果構文がこのような特異な項実現パターンを持つのか、ということについて考察する。

V1V2 は結果複合動詞であり、＜V1 したことで V2 という結果が生じる＞、という意味を表す。そのため、[NP1 V1V2 NP2]という形式は論理的には(8)のように 4 つの意味実現の可能性が存在する。

(8) a. NP1 が V1 したことで NP1 が V2 する　　c. NP2 が V1 したことで NP1 が V2 する
　　b. NP1 が V1 したことで NP2 が V2 する　　d. NP2 が V1 したことで NP2 が V2 する

この中で、(8b)は通常の他動詞構文である（“我打碎了花瓶” I hit-be.broken-PERF vase）。そして、(8c)は通常の使役事象を表しているが、動作主が目的語、被動作主が主語にあるため（主語・目的語を決定する際の意味的な要因については Dowty 1991 を参照）不可能な実現パターンとなる（“*花瓶打碎了我”）。(8a)のような文は“我吃腻了漢堡” (I eat-get.tired.of-PERF hamburger)のような構文で、動作主が主語、被動作主が目的語として実現しているが、他動詞構文とは異なり、V2 の状態変化を受けるのは動作主である。この構文は本発表の対象ではないため詳細は別稿に譲る。そして、(8d)の再帰的な構文が本発表で検討する原因型結果構文である。このように原因型結果構文は理論的に実現可能なパターンだが、なぜそれが成立できるのだろうか。

ある使役事象の参与者のプロトタイプ的な意味役割は使役者及び被使役者である。そして、このプロトタイプからさらに使役者の意図性の有無によって、意図的な動作主と被動作主、そして、非意図的な原因と受影者へと下位分類することができる。動作主と被動作主の使役構文は(8b)のようなものである。それに対し、 (8d)の原因型結果構文は原因と受影者の使役構文だと考えることができる。その上で、使役連鎖の観点からみると、使役連鎖の起点である原因は主語として実現されやすく、終点である受影者は目的語として実現されやすい（Croft 1991 を参照）。そのため、(8d)のような項実現が可能となるのである。

３．２　フレームに基づく分析

次に、意味構造の問題についてだが、フレーム意味論において、意味は独立しているものではなく、背景状況や関連する概念と共に喚起されると考える（Fillmore 1982）。本発表が用いる語彙的意味フレームとはある語の意味あるいはその語が喚起するもので、動詞の場合はそれが指し示す動作だけではなく、その動作を引き起こすことができる「原因」やその動作によって起こりうる「結果」のほか、「手段」、「目的」、「様態」など、動作と関連する事象を含む意味構造である。例えば“吃”という動詞が指し示す中心事象は＜摂食者が食べ物を口に入れ、飲み込む＞だが、その背景には様々な関連する事項がある。なぜ食べるのか、どうやって食べるのか、食べるとどういう結果が起こるのか、などである。これは多種多様であるが、決して何でもありというわけではなく、限定的なものである。例えば、何かを食べたために満腹になったり、体重が増えたり、気持ちが悪くなったりするが、声が枯れたり、髪が縮れたり、肩が凝ったりすることはあまり考えられない。このように判断できるのは、食べるという行為の周辺的事象に関する知識を私たちが持っており、そして、このような情報はその行為を表す動詞と結びついていることを示している。

語彙的意味フレームは、中心事象、関連事象、および、それらの参与者からなる。そのうち、事象参与者と関連事象は「フレーム要素」（【】で表す）である。語彙的意味フレームを用いることで、“吃死”が成立できるのは、表1のように、結果複合動詞のコンストラクションが指定する特定の意味的一致性（表における網かけと四角で囲まれた部分）が存在するからだと説明できる。加えて、“吃”の起こりうる【結果】の一つに「（体に害するものを食べたら）【摂食者】が死ぬ」という情報があるため、“死”の中心事象との意味的一致により、V1 の【摂食者】と V2 の【生物】が同一物と見なされる。それによって、“吃死”が再帰的な構造を持つことが可能だと判断できる。

表 1 “吃”と“死”の語彙的意味フレーム（紙幅のため一部の情報を省略して表示する）

	V1 “吃” (eat)	V2 “死” (die)
中心事象	【摂食者】が【食べ物】を【口】に入れ、飲み込む	【生物】が生命活動を停止する
事象参与者	【摂食者】【食べ物】【口】【飲食の場所】…	【生物】【場所】【時間】…

関連事象	【結果】	(【摂食者】が満腹になる;【摂食者】がお腹を壊す;【摂食者】が死ぬ;…)	【原因】	(病気になったことで;事故に遭ったことで;体に害するものを食べたことで;…)
	【様態】	(ゆっくりと;すばやく;…) ⋮	【様態】	(眠るように;突然に;…) ⋮

一方、“打” (hit) の【結果】には「打たれた【対象】が{壊れる/潰れる/死ぬ}」などの情報はあるが、「【打撃者】が死ぬ」という情報が含まれていないため“打死”は原因型結果構文になれないと説明できる。

また、原因型結果構文の主語として実現する原因という意味要素は(7)の“暗黄的燈”のように、V1 や V2 の項ではない場合がある。このような例は、于 (2015) などで用いられている LCS では、それがどのように具現化されたのかを説明できない。一方、フレーム意味論では“暗黄的燈”は“累”の語彙的意味フレームの【原因】に含まれるフレーム要素であり、“看”における【光源】でもあるため、これらのフレーム要素の合成として実現される。

３．３　コンストラクションに基づく分析

構文文法とは、構成要素や一般的な規則・パラメータでは説明できない、構文（コンストラクション）そのものの形式が意味を持つ場合があると考える理論モデルである（Fillmore 1985 など）。本発表は(2)と(3)に見られる意味的な制約を、構文の慣習化という観点から説明する。慣習化とは、繰り返しある条件下である言語形式が使用されることで、その条件と言語形式が結びつくことである。まず、原因型結果構文がネガティブな状態変化に限られるという制限だが、これは以下の仮説で説明できる。再帰的な状態変化は多くの場合ネガティブなものであり、ポジティブや中立な状態変化は“吃飽”や“睡醒”などを除き、“修好” (fix-be.repaired)、“洗浄” (wash-be.clean) などのように、他者からの働きかけによる（再帰的でない）場合が多数を占めていると考えられる。そのため、この構文は主としてネガティブな状態変化を表す場合で使用され、その結果、ネガティブな状態変化が構文の意味として慣習化され定着した。それによって“吃飽”のように、たとえ再帰的な構造を持っていてもネガティブな状態変化でないと成立できない。

この仮説を実証するために、本発表は、『漢語動詞-結果補語搭配詞典』に修正を加えた石村（2007）に挙げられている結果複合動詞を構成する V2（単音節形式の 253 語）を対象に、それらが作る再帰的な V1V2 を Academia Sinica Balanced Corpus of Modern Chinese (<http://lingcorpus.iis.sinica.edu.tw/modern/> 台湾の中央研究院が開発した現代中国語書き言葉均衡コーパスで、収録語数は 11,245,330 語である。以降 Sinica Corpus) から収集した。こうして集めた再帰的な V1V2（全 474 語）を、その例文から変化を被る対象にとって、その変化がどのようなものなのかを基に、表 2 のようにポジティブ、ニュートラル、ネガティブ、という 3 種類に分類した。

表 2　再帰的な状態変化を表す V1V2 の評価に基づく分類

	ポジティブ	ニュートラル	ネガティブ
再帰的な状態変化を表す V1V2 のタイプ数	58	63	353

表 2 から、再帰的な状態変化を表す V1V2 はネガティブな状態変化が有意に多いことがわかる(χ^2 (2) = 161.546, $p < .0001$)。したがって、原因型結果構文に見られるネガティブな状態変化に限定されるという制限は構文の慣習化によるものだと考えられる。付け加えると、これらの評価はフレーム的知識に基づくものである。例えば、“睡醒”がニュートラルな意味を表すのに対し、“驚醒” (be.surprised-wake.up) がネガティブな意味を表すのは動詞が指し示す動作だけでは説明できない。悪夢で驚く場合もあれば、嬉しいサプライズで驚く場合もあるため、“驚”自体はニュートラルである。“驚醒”がネガティブな意味を持つのは、驚いて目が覚めた場合に嫌な気分になるという、関連事象の【結果】の情報によるものである。

次に、移動の位置変化が原因型結果構文として成立しないことについては、意志性の介入が関わっていると思われる。原因型結果構文における原因となる出来事は、結果となる出来事の発生と進行を完全に決定できるものでなければならないと考えられる（松本 1998 の「決定的使役の条件」を参照）。例えば、(9a)と(9b)の容認度の違いは NP1 が直接的な原因かどうかによるものである。

(9) a. 一根火腿腸　　吃壞了　　我的肚子。
one-CL-sausage　eat-be.broken-PERF　I-GEN-stomach
'A sausage caused my stomach upset from eating it.'
(<http://www.120ask.com/question/61710872.htm> 2018/05/12 確認)
b. *炎熱的天氣　　吃壞了　　我的肚子。
hot-GEN-weather　eat-be.broken-PERF　I-GEN-stomach
Intended: The hot weather caused (food to go bad which made) my stomach upset from eating rotten food.

そして、位置変化の場合は落下などの移動を除き、大抵は自律移動によるものであり、移動主体の自由意志が介入されるため、原因は完全に移動の結果を決定できるものではない。そのため、原因型結果構文は位置変化を表すものが現れにくく、それが慣習化によって、意味的な制限（位置変化は不可）として定着した。結果、(3)のような意志性が介入しない場合でも成立できないと考えられる。この仮説を実証するために、同じように Sinica Corpus から移動を表す V2（"到" arrive, "過" pass, "回" return, "出" exit, "進" enter, "下" go down, "上" go up, "近" approach, "遠" go away, "動" move, "飛" fly, "走" walk, "跑" run）が作る再帰的な V1V2（全 269 語）を収集した。そして、その移動が自律移動かどうかによって分類した結果が表 3 である。

表 3　再帰的な移動表現を表す V1V2 の意志性に基づく分類

	自律移動	非自律移動
再帰的な移動を表す V1V2 のタイプ数	217	52

表 3 のように、再帰的な移動を表す V1V2 は自律移動＝意志的なものが有意に多い (χ^2 (1) = 54.512, p < .0001)。

以上のように、原因型結果構文には従来見逃されてきた意味的な制約が存在しているが、構文の慣習化という観点から自然な説明を与えることができることを示した。

４．他の使役構文との比較

再帰的な状態変化の使役を表す原因型結果構文には前述のような特殊な意味的制約が存在するが、このような制約は関連するほかの使役構文にも見られるのか、という疑問が生じる。本発表はこの制約が原因型結果構文固有のものであることを、使役マーカーである"使"及び"讓"が用いられる使役構文と比較することで示す。

"使"、"讓"構文は有標の使役構文であるため、原因型結果構文とは違い、その形式は(8b)の他動詞構文と容易に区別できる。そのため、再帰的な構造に限られる原因型結果構文とは異なり、自動詞だけではなく、"這幅畫{使/讓}我想起我的故鄉" 'this painting makes me recall my hometown'のように他動詞でも成立する。

次に、"使"、"讓"構文のように、動詞のタイプに制限がない状態で、ネガティブな変化に限られるという意味的な制約が生じるのかを考察するために、魯迅の『故郷』という短編小説に出てきた全 250 語の動詞を対象に、その評価に基づいて分類を行った。その結果、動詞に制限がない場合は、表 3 のように、ニュートラルなものが有意に多かった(χ^2 (1) = 56.608, p < .0001)。これはそもそも変化を表さない動詞が多かったからである。

表 4 『故郷』における動詞の評価に基づく分類

	ポジティブ	ニュートラル	ネガティブ
動詞のタイプ数	31	178	41

この結果は、動詞を制限しない"使"、"讓"構文が評価に関しては未指定であるという予想に繋がる（ニュートラルが有意に多いことは構文の意味がニュートラルなものに限られるというわけではなく、そもそも未指定であると思われる）。そして実際、"使"、"讓"構文は(10)のように、ポジティブな場合でもネガティブな場合でも成立する。

(10) 他　{使/讓}　我　{開心/哭泣}。
he　{cause/cause}　I　{be.happy/cry}
'He makes me {happy/cry}.'

また、“使”、“讓”構文は原因型結果構文と違って生産性が高く、いわゆる生産的使役（Shibatani 1976）であるため、決定的使役の条件の制限を受けない。そのため、“使”、“讓”構文は意志性が介入するかどうかにかかわらず、移動の使役事象を表すことができる（“他｛使/讓｝我｛摔倒/臥倒｝” ‘he made me {fall down/grovel}’）。

５．結論

以上のように、本発表はフレーム・コンストラクション的アプローチを用いることで、複合動詞が再帰的な構造であるかどうかを判断できるようになること、そして、強い使用傾向が意味的な制約として定着するのは、構文の慣習化という一般的なメカニズムで説明することができ、アドホックな規則を設ける必要性を回避できることを示した。“使”、“讓”構文のような生産性が高く、制限が少ない構文には、特殊な意味が生じにくいが、原因型結果構文のような使用環境が特殊な構文の場合は、特異な制約が生じやすいのである。

理論的な貢献として、本発表はフレーム・コンストラクション的アプローチの実践例として、両者が相互に補完し合う、切り離すことのできない理論であることを示した。同時に、言語が実際の言語使用によって形作られた複雑適応系（complex adaptive system）であるという Beckner et al. (2009) の主張を支持するものである。

参照文献

秋山 淳 (1998)「語彙概念構造と動補複合動詞」『中国語学』245: 32-41.

Beckner, Clay, Richard Blythe, Joan Bybee, Morten H. Christiansen, William Croft, Nick C. Ellis, John Holland, Jinyun Ke, Diane Larsen-Freeman and Tom Schoenemann (2009) Language is a complex adaptive system: Position paper. *Language Learning* 59: 1-26.

陳 奕廷・松本 曜 (2018)『日本語語彙的複合動詞の意味と体系―コンストラクション形態論とフレーム意味論―』東京：ひつじ書房.

Croft, William (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. Chicago: University of Chicago Press.

Dowty, David (1991) Thematic proto-roles and argument selection. *Language* 67: 547-619.

Fillmore, Charles J. (1982) Frame semantics. In: Linguistics Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, 111-137. Seoul: Hanshin.

Fillmore, Charles J. (1985) Syntactic intrusions and the notion of grammatical construction. *BLS* 11: 73-86.

Her, One-Soon (2007) Argument-function mismatches in Mandarin resultatives: A lexical mapping account. *Lingua* 117: 221-246.

Huang, C.-T. James. (2006) Resultatives and unaccusatives: A parametric view.『中国語学』253: 1-43.

石村 広 (2007)「『漢語動詞-結果補語搭配詞典』補遺：結果補語になる述語について」『成城文藝』198: 50-71.

石村 広 (2011)『中国語結果構文の研究－動詞連続構造の観点から－』東京：白帝社.

Lee, Leslie and Farrell Ackerman (2011) Mandarin resultative compounds: A family of lexical constructions. In: M. Butt and T. Holloway King (eds.) *Proceedings of the LFG11 Conference*, 320-338. Stanford, CA: CSLI Publications.

Li, Yafei (1995) The thematic hierarchy and causativity. *Natural Language & Linguistic Theory* 13: 255-282.

松本 曜 (1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114: 37-83.

沈 力 (2013)「結果複合動詞に関する日中対照研究―CAUSE 顕在型と CAUSE 潜在型を中心に―」影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端―謎の解明に向けて―』: 375-411. 東京：ひつじ書房.

Shibatani, Masayoshi (1976) The grammar of causative constructions: A conspectus. In: M. Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics*, Vol. 6, 1-39. New York: Academic Press.

Sybesma, Rint (1999) *The Mandarin VP*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

Traugott, Elizabeth C. and Graeme Trousdale (2014) *Constructionalization and constructional changes*. Oxford: Oxford University Press.

邱 林燕 (2017)「中国語結果構文の統語論的研究」北海道大学博士学位論文.

于 一楽 (2015)「中国語結果複合動詞の意味構造と項の具現化」由本陽子・小野尚之（編）『語彙意味論の新たな可能性を探って』: 102-129. 東京：開拓社.